



「僕らがこうやって頑張るのは、全国のみなさんが僕らを支えてくれているから」と語る岡本さん。私たちが15年、20年先も変わらず興味を持ち続けなければ、目標となる1万7000本もの植樹は実現しない。

という話が毎年語り継がれると考えました(佐藤)

「自然災害は絶対に人間には防げません。いかに被害を減らすかしかできない。そして、震災以降には約300人の子どもが誕生しています。震災当時、幼かった子どもたちは記憶も薄れていきます。20年後、大人になった彼らがまちの中心となりました。次の世代に僕らの原体験をどう引き継いでいくかは今の時期から始めなければなりません。それに、僕らは悲しく、悔しいことがあります。僕が、子どもたちにはそれだけの記憶で自分の故郷を捉えてほしくないんです(岡本)

「桜ライン311」がつながう人と人、もうひとつの故郷。

植樹ができるのは、11月と3月に限られるが、毎回多くのボランティアが参加し、3月15日に行われる植樹会は定員200名がすぐに埋まった。その半分以上がリピーターとなり、何度もここに足を運んでいる。

「2012年に30人ほどで植樹をした現場があり、造成のため一時的に木を預かることになり、再び作業に行ったんです。そのとき地権者の方に、1〜2か月おきにボランティアさんが2、3人のチームで苗の管理

を自発的にしていたことを教えてもらいました。このプロジェクトを機にそうした関係性が生まれているのは、本当に嬉しいことです(岡本)

震災後、陸前高田へ行くためには車に相乗りするなど、限られた移動手段しかなかったが、2012年以降、不通となっていたJR気仙沼線・大船渡線がBRT(バス高速輸送システム)で復旧したことで、遠方からのアクセスがしやすくなった。何度もこのまちに足を運び、住民との関係性を築いたボランティアの人たちにとっても、ここは「もうひとつの故郷」。10年、20年後、桜の木が大きくなる頃には、自分の子どもを連れ、観光とは違った「もうひとつの里帰り」をするのかもしれない。

「ピンクのラインができる頃には、まちづくりも進んでいます。BRTと並行している地域もあるので、車窓からピンクのラインを見てもうれしく嬉しいですね。そして、ゆくゆくは現在このまちに住む人たちが優しい気持ちで桜を見られるようになるればいいなと思います(岡本)

「桜ライン311」の桜のポイントへの行き方。

気仙沼駅から大船渡線BRTに乗車し盛駅へ。脇ノ沢駅を過ぎ、東西の湾から津波の被害にあった小友駅付近までは、BRTルートの両側に桜の木が並ぶ。「大きく育った桜がズラリと並ぶのが最終的なイメージです」と副代表の佐藤さん。



BRTとは……

Bus Rapid Transit バス高速輸送システムの略。東日本大震災で甚大な被害を受けた気仙沼線・大船渡線が走る柳津駅(登米市)～気仙沼駅(気仙沼市)～盛駅(大船渡市)の間を走行し、地域の人々の足を支えている。気仙沼線は、2012年8月、大船渡線は2013年3月より運行を開始している。



目を引く赤いボディとラッピング車両。外装にはご当地キャラクターの気仙沼市の「ホヤぼーや」や南三陸町の「オクトバス君」、そして陸前高田市の「たかたのゆめちゃん」などが描かれ、地元の方や訪れた人に楽しんでもらう工夫をこらしている。写真は、気仙沼駅に到着したBRT。

東北の旅は、JR東日本で。 www.eki-net.com/travel



「桜は人それぞれの想いに寄り添う存在」と、代表の岡本さん。

20年、30年……時間をかけてまちの人と取り組む。

広田湾(岩手県陸前高田市)から約2キロのところに位置する米崎小学校。海からここまで、高台以外に建物も樹木も見あたらない中、若い桜の木が植えられている。この桜は、市内約170キロにわたる津波到達ラインに10メートル間隔で桜を植樹し、震災を後世に伝えるプロジェクト「桜ライン311」で植樹されたもの。代表の岡本翔馬さんと、副代表であり、米崎小学校仮設住宅自治会長でもある佐藤一男さんは、このプロジェクトへの想いをこう語る。

「津波到達地点の目印を後世に残せないかと考えていたとき、陸前高田市市長・戸羽太氏の著書『被災地の本当の話をしよう』の中に、「いつか心の癒しとなる桜を植えたい」とあったんです。桜なら毎年花が咲いて、何百年後も、なんでこんなに桜があるの?」昔大きな津波が来て……

BRTが走行する高田病院駅から目と鼻の先にあるのは、「3月11日に咲くといひね」と、松田町(神奈川県)から贈られた早咲きの河津桜。



JR東日本・BRTが担う東北の復興

第1回

近づく春に願いを込めて、震災から3年の「桜ライン311」。

東日本大震災により、甚大な被害を受けた岩手県陸前高田市。震災から3年、このまちには161か所に647本の桜が植えられている。市内の津波到達ラインを桜で標す「桜ライン311」は、人と人をつなぐもうひとつのラインでもありました。

photographs by Natsuki Yasuda text by Nanae Konishi illustration by Mako

2014 / 3.5 / ヴィクト